12　「物語」─中世の擬古物語

20年度　東洋大学

★　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

　明けはてぬさきにとれど、Ⅰ巳の時ばかりにぞうちやすみたまへど、身には心もａ添はずながめアられて、「Ⅱさらにいみじき心の乱れも出できぬべきかな」と、心ひとつにのみぞｂ思ひくだくる。こよひはＯ便なげにのたまひつれど、かひなきながら、Ⅲおはすらむさまをもいかで見むと思へど、、月の宴したまひて、①夜すがら遊び明かしたまふ。

　次の日もいとま許されず、②まつはし暮らさせたまふ。雨いみじく降りて、心細き旅寝も、いまさらに面影添へるは、げに③あぢきなき身の思ひなり。

　　Ｘ　知らざりし思ひを旅の身に添へていとど露けき夜の雨かな

　同じ月日も、がらは久しき心地するに、ひとり寝の秋の夜は、まして思ひ残すことなけれども、かのⅣ御形見の音をだにえかきならさず。イし教へを思へば、いとど④のみ慎むさへ慰めがたければ、

忘れウじとｃ伝へし琴の音に立てて恋ひ⑤だにみ　　Ｙ　　秋の長き夜

　からうじて明け行くの声に、勅使急ぎ来て、けふもⅤ御遊びあるべきよし言へば、日高う、みな参り集まりぬ。心はそらにのみ浮き立ちながら、さまざま遊び暮らすに、Ｐ例のいとま許されず、夜も明けエぬ。

　かのは、けふぞ都へ帰りｄたまふ。Ｑいはけなくてに⑥まひける秋の月の夜、仙人りて、この琴をｅ教へけるによりて、八月九月の月のさかりには、かならずかの山にこもりて、⑦この音をならしたまふ。いまの御門の后腹にて、世になくもてかしづきたまふ公主なれば、天の下なびき従ひｆきこえぬ人なし。Ⅵ九重にいつかれ入りたまふをはるかに聞くに、言ふかひなく物悲しくて、ただひしほどを待ちわたるに、はかなく過ぎて、九月十三夜にもなりぬ。

（注）　１　急ぎ帰れど……唐土に渡った主人公の氏忠は、商山（中国省商県の東南にある山）で皇女に琴を習い、都の宿舎へと帰った。

２　ところがら……唐土という場所がら。

３　ありし教へ……氏忠に華陽公主から琴を習うよう勧めた老翁の教え。伝授されたのちは唐土でその音を響かせてはならないということ。

４　この山……商山。

５　ひとつ后腹にて……同じ后からの生まれで。

６　のたまひしほど……華陽公主が再会を約束した時。

問１　二重傍線部ａ「添は」・ｂ「思ひくだくる」・ｃ「伝へ」・ｄ「たまふ」・ｅ「教へ」・ｆ「きこえ」の活用形として最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。同じ選択肢を繰り返し選んでもよい。

①　未然形　　②　連用形　　③　終止形

④　連体形　　⑤　已然形　　⑥　命令形

ａ＝〔　　　〕　　ｂ＝〔　　　〕　　ｃ＝〔　　　〕

ｄ＝〔　　　〕　　ｅ＝〔　　　〕　　ｆ＝〔　　　〕

問２　二重傍線部ア「られ」・イ「し」・ウ「じ」・エ「ぬ」の文法的説明として最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。

ア　られ

　①　受身の助動詞　　②　尊敬の助動詞　　③　自発の助動詞

　④　可能の助動詞　　⑤　動詞の一部

イ　し

　①　使役の助動詞　　②　尊敬の助動詞　　③　過去の助動詞

　④　完了の助動詞　　⑤　動詞の一部

ウ　じ

　①　打消の助動詞　　②　打消意志の助動詞

　③　過去の助動詞　　④　完了の助動詞

　⑤　動詞の一部

エ　ぬ

　①　打消の助動詞　　②　打消意志の助動詞

　③　過去の助動詞　　④　完了の助動詞

　⑤　動詞の一部

問３　波線部Ｏ「便なげに」・Ｐ「例の」・Ｑ「いはけなくて」の意味として最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。

Ｏ　便なげに

　①　落ち着かずに　　　　②　自信がないように

　③　都合が悪いように　　④　平然として

　⑤　希望通りに

Ｐ　例の

　①　長期間の　　②　少しばかり　　　　③　特別に

　④　常識的に　　⑤　いつものように

Ｑ　いはけなくて

　①　心細くて　　　②　体調が悪くて　　③　美しくて

　④　懐かしくて　　⑤　幼くて

問４　傍線部Ｉ「巳の時」は何時頃のことか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　午前二時頃　　②　午前六時頃　　③　午前十時頃

④　午後二時頃　　⑤　午後六時頃　　⑥　午後十時頃

問５　傍線部Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ｖ・Ⅵの解釈として最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。

Ⅱ　さらにいみじき心の乱れも出できぬべきかな

　①　わずらわしい心の乱れも生じてくるのは仕方のないことなのだ

　②　これからどのような心の乱れが生じてしまうのだろうか

　③　絶対にこれ以上の心の乱れを起こしてはいけないのだ

　④　いっそうひどい心の乱れも生じてしまいそうだ

　⑤　わずかな心の乱れも生じないようにしなければならないのだ

Ⅲ　おはすらむさまをもいかで見むと思へど

　①　昨晩お伝えした自分の真心をも何とかお見せしたいと思うが

　②　おそばにいる公主にもどうにか気づいてほしいと思うけれど

　③　いらっしゃるであろう公主の様子をもなんとかして見ようと思うが

　④　お話をなさっている御門にどうやって謁見すればよいのだろうと思うが

　⑤　すばらしくていらっしゃる御門のご威光をぜひとも目にしたいと思うけれど

Ⅳ　御形見の音をだにえかきならさず

　①　忘れられた琴の音色を響かせることはできない

　②　残された家族に配慮して琴の演奏すらなさらない

　③　故人の愛した曲だけはかき鳴らすこともしない

　④　相続した財産についてはお話もなさらない

　⑤　思い出の琴の音をさえかき鳴らすことができない

Ｖ　御遊びあるべきよし言へば

　①　宮中の宴には必ず参加するようにと言われたならば

　②　御門を楽しませるような提案をするようにと言うと

　③　遊女や楽人を出席させた方がよいと言ったところ

　④　勤務の合間には休憩を取った方がよいと言うと

　⑤　御前の奏楽が行われるであろうとの趣旨を言うので

Ⅵ　九重にいつかれ入りたまふをはるかに聞くに

　①　宮中にかしずかれてお入りになるのを遠く聞くと

　②　厳重に守られながら入山なさると以前から聞いていて

　③　九月中のいずれかの日にはお帰りになるとうわさに聞いたが

　④　この山に九週間もの間おこもりになっていると聞くと

　⑤　お疲れが出たのでお休みになっていると人づてに聞いて

問６　Ｘの歌「知らざりし思ひを旅の身に添へていとど露けき夜の雨かな」からは、誰のどのような気持ちがうかがえるか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　知らない土地へと旅立つ氏忠との別れを惜しみ、悲しみに暮れている御門の気持ち

②　人知れず悩んでいる様子の氏忠を心配し、外出して気晴らしをするよう勧める御門の気持ち

③　異国で暮らす身の上に、いままで経験しなかった恋の悩みが加わり、ますます苦悩する氏忠の気持ち

④　公主の秘めた思いにも気づかず、これまで各地を転々としてきた自身のふるまいを、心から悔やむ氏忠の気持ち

⑤　盛大な送別の宴を開いてくれた御門の何気ない心配りに感謝し、旅に出てもこの温情を忘れまいとする氏忠の気持ち

問７　空欄Ｙに入る語として、「恋ひだにみ　Ｙ　」が「せめて恋い慕ってみたいものだ」の意になる最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

　　①　しも　　②　ばや　　③　やは　　④　かも　　⑤　らる

◎問８　本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選べ。

①　御門は氏忠の行動に不審を感じ身辺から遠ざけた。

②　観月の宴は午後十時頃にお開きとなった。

③　氏忠と公主は人目を忍んで和歌を贈答した。

④　公主は商山に住む仙人に琴の演奏法を伝授した。

⑤　世間で公主に心を寄せない人はいなかった。

【確認問題】

１　波線部①・③の本文中の意味として適当なものを、それぞれ次から選べ。

　①　夜すがら

　　ア　今夜だけは　　イ　毎晩

　　ウ　一晩中　　　　エ　昼夜問わず

　③　あぢきなき

　　ア　やっかいな　　イ　似つかわしい

　　ウ　素っ気ない　　エ　驚くべき

２　波線部④・⑤の助詞の文法的意味として適当なものを、それぞれ次から選べ。

④「のみ」

　ア　類推　　イ　限定

　ウ　強意　　エ　完了

⑤「だに」

　ア　添加　　イ　あつらえの希望

　ウ　強意　　エ　最小限の限定

３　波線部⑥「物忌」の説明として最も適当なものを、次から選べ。

ア　日や方角が悪いとされるときに、一定期間家にこもって心身を清めること。

イ　日や方角が悪いとされるときに、出かける際にある方角を避けること。

ウ　近しい人が亡くなったときに、一定期間喪に服すこと。

エ　近しい人が亡くなったときに、自宅に親戚を呼んで葬儀をとり行うこと。

【補充問題】

４　波線部②について説明した次の空欄に当てはまる語句を、それぞれ次から選べ。

　（ Ｘ ）が（ Ｙ ）を（ Ｚ ）ということ。

　　　Ｘ　ア　御門　　イ　氏忠　　ウ　公主

　　Ｙ　ア　御門　　イ　氏忠　　ウ　公主

　　Ｚ　ア　劣悪な環境で生活させた

　　　　イ　一日中待ち続けていた

　　　　ウ　豊かな暮らしをさせた

　　　　エ　一日中身近にいさせた

５　波線部⑦「この音」とは、どのような音のことをいっているのか。適当なものを次から選べ。

ア　老翁が氏忠に教えた、決して演奏してはならない琴の音

イ　公主が氏忠に教えた、この上なく美しいと評判の琴の音

ウ　老翁が公主にたいそう雨の降る夜に教えた琴の音

エ　仙人が公主に満月が出ている秋の夜に教えた琴の音

【解答】

問１　ａ＝①　ｂ＝④　ｃ＝②　ｄ＝④　ｅ＝②　ｆ＝①

問２　ア＝③　イ＝③　ウ＝②　エ＝④

問３　Ｏ＝③　Ｐ＝⑤　Ｑ＝⑤

問４　③

問５　Ⅱ＝④　Ⅲ＝③　Ⅳ＝⑤　Ⅴ＝⑤　Ⅵ＝①

問６　③

問７　②

問８　⑤

【確認問題】

１　①＝ウ　③＝ア

２　④＝ウ　⑤＝エ

３　ア

【補充問題】

４　Ｘ＝ア　Ｙ＝イ　Ｚ＝エ

５　エ

【現代語訳】

　夜がすっかり明けてしまわないうちにと急いで帰るが、午前十時頃にお休みになったものの、身に心が寄り添っていないようにぼんやりと物思いに沈んで、「いっそうひどい心の乱れも生じてしまいそうだ」と、自分独りで思い乱れている。（公主は）今夜は都合が悪いようにおっしゃったが、無駄ではあるけれども、（商山に）いらっしゃるであろう（公主の）様子をなんとかして見ようと思うが、御門は、観月の宴を開催されて、一晩中奏楽の遊びをして夜を明かされる。

　次の日も（御門は氏忠に）休暇をお許しにならず、一日中身近にいさせなさる。雨がひどく降って、もの寂しい旅寝も、今となってはことさらに（恋しい）面影が加わるのは、本当にやっかいな我が身の苦悩である。

　今まで経験することのなかった恋の悩みを旅の身に加えて、（その涙のために）いっそう露っぽい夜の雨であることよ。

　同じ月日でも、唐土という場所がらでは長く感じるのに、独り寝をしている秋の夜は、いっそう物思いをし残すことはない（＝物思いにくれている）けれども、（公主の）思い出の琴の音をさえかき鳴らすことができない。かつての（老翁の）教えを思えば、いよいよただただ慎重にする（＝琴を弾くのを控える）ことまでが気持ちを紛らわしにくいので、

　忘れることはすまいと習い伝えた琴の音にのせて、せめて（公主を）恋い慕ってみたいものだ。秋の長い夜に。

　やっとのことで（夜が）明けていく（時間を知らせる）鼓の音に、勅使が急いでやってきて、今日も御前の奏楽が行われるであろうとの趣旨を言うので、日が高くなるころ、皆参集した。心はうわの空で浮き足立ちながら、いろいろと一日ずっと演奏するものの、いつものように（御門から）休暇を許されることなく、夜も明けた。

　あの公主は、今日都にお帰りになる。幼くてこの商山で物忌みなさっていた秋の月の夜、仙人が（空から）下ってきて、この琴（の曲）を（公主に）教えたので、八月九月の満月のころには、（公主は）必ずあの商山にこもって、この琴の音を鳴らしなさる。現在の御門と同じ后からの生まれで、この上なく（周囲の方々が）大切にしなさっている公主であるから、この世で心を寄せ従い申し上げない人はいない。宮中にかしずかれてお入りになるのを遠く聞くと、どうしようもなくもの悲しくて、ただただ（公主が再会を）約束なさったときを待ち続けるうちに、あっけなく時は流れて、九月十三夜にもなった。